

〔夫木和歌抄三十三〕弘長元年百首釋文

ちかひのふね

わたしもりちかひの舟は心せよのりかたぶくる人もこそあれ

信實朝臣

〔三十二番職人歌合〕十番 左

渡守

櫻川花にゆるさぬふなどこををしてはいかゞわたるはる風  
〔藤河の記〕くゐせ川といふ所を舟にてわたりて、

渡し守ゆきゝにまもるくゐせ川月の兎もよるや待らん

〔平安紀行〕岩淵にて

をちかへりみなはさかまく岩ぶちのみどりを分て渡す舟人

〔落書露顯〕つくしに侍しころ人の京連歌とてかたりし句に、

わたし守舟つなぐまでくれはてゝといふ句を口て侍し、おもしろくきゝて侍しを後に聞侍  
れば、四條時衆あみだ佛句にて侍りける、

〔己未紀行〕廿四日〇寛政十一年二月若山をたちて、岩手といふ所より、紀の川をあなたにわたる。○本居こ

こはのぼりくだるふねにつみたる物かむがふる司のあるが出来て、事おこなへば、船ども

こゝら川岸にさしよせて、らうがはし、

ふねのうちにつむは何ぞとわたし守いはではたゞにすぐさゝりけり

〔拾要抄五〕延享四年卯九月十八日

一本所中之郷竹町舟渡請負人、次郎左衛門申上候、私儀、八拾壹年以來、寛文七未年より、竹町舟渡  
受負仕候處、船數拾艘、船頭番人共貳拾貳人抱置、中之郷御上り場をも奉預矢來等自分入用に  
而仕候處、近年給金相増井、船修復入用等年々相掛損金仕候ニ付、古來之通、舟賃貳錢宛ニ仕度